

京都府立大学文化遺産叢書 第26集

京丹後市久美浜町太刀宮文書
(久美浜代官所郡中代等文書)・
佐治家資料調査と御用留横断研究

刊行にあたって

京都府立大学文学部歴史学科では、府域を中心に、地域の歴史や文化遺産に対する研究をおこない、成果を文化遺産叢書として公刊してきた。その第26集となる本書は、科学研究費「公儀触伝達にみる徳川領国と国持外様領国の両領国体制の存在と構造—幕藩体制構造研究」（研究代表者山田洋一）の成果のまとめである。

本書は、研究の基礎史料とするために行った京都府京丹後市久美浜町の神谷神社（太刀宮）が所蔵する太刀宮文書（久美浜代官所郡中代等文書）・佐治家資料（『京都府熊野郡誌』編さん関係資料等）の調査の報告と公儀触等が含まれる同文書中の御用留及び各地の御用留の横断的な研究の論考から構成され、それぞれの研究に資するものとなっている。

今回の調査研究の遠因は、府大アクター「丹後地域史の地域的特性に関する基礎的研究」（2004年）、京丹後市史資料編『久美浜代官所関係史料集』（2014年）編さんなどである。後者の過程で太刀宮文書の重要性を認識し、デジタル画像で公開されることが希望された。幸いに科研費が採択され、所蔵者をはじめ地域の関係者の協力を得て調査を実施し、画像化を終えることができた。

久美浜代官所は享保20年（1735）、丹後国熊野郡久美浜村（京丹後市）に、湾に面して設けられた公儀（幕府）の「海の代官所」である。同所付きの役人が少なかったため、同村の庄屋が、領地の村々との仲介事務を行う郡中代を兼帯していた。郡中代を務めた今西家には郡中代の文書や維新後の久美浜県、豊岡県関係の文書が所蔵されていた。これらが、大正7年（1918）に神谷神社へ寄附され、太刀宮文書となり、『京都府熊野郡誌』（1923年）の編さんなどにおいて活用された。

その他に、この編さんに関係する資料が神谷神社宮司佐治家に残されていたことが今回の調査で分かった。佐治家資料である。同家が編さんに関わっていたのである。この中には秋田県出身の熊野郡長深澤多市執筆による「久美浜県史」の原稿等もあって、同資料が貴重なものであることが確認できた。

本書には、これまで太刀宮文書に関係された研究者から、また、府内外の調査においてご教示をいただいた研究者からもご寄稿をいただいた。これにより本書がさらに同文書、地域、全国の研究に資するものになったと感謝している。

郡誌編さんの頃、久美浜の人びとは、地域の歴史資料の保存、活用のため、豊岡から元久美浜県庁の建物の一部を移築して、神谷神社にアーカイブズ（文書、文書館）や博物館機能等を有する「参考館」を設置した。同館は、当初は太刀宮文書等を収蔵し、「故

きを温ねて新しきを知る（温故知新）」施設として活用された。今は久美浜の歴史を象徴する建物のみとなったが、同文書等は画像化され利用しやすくなった。然るべき施設において地域の未来を考える「温故知新」活動に使用されることが望まれる。それは参考館を設置した先達の志を継ぐことであり、生涯学習の支援（地域貢献活動）という本学の理念にそうことである。今後も機会をとらえて協力を行っていききたい。

この調査では、神谷神社をはじめ地域、各地の研究者、機関に御協力をいただいた。末筆ながら深謝の意を表しておきたい。

京都府立大学文学部歴史学科

本書の構成と視点

山田洋一

本書は、科研費「公儀触伝達にみる徳川領国と国持外様領国の両領国体制の存在と構造―幕藩体制構造研究」の成果をまとめたものである。第一部「一 太刀宮文書（久美浜代官所郡中代等文書）・佐治家資料調査」、第二部「二 御用留横断研究」の二部構成となっている。

第一部は、科研費研究の基礎史料とするために行った太刀宮文書（久美浜代官所郡中代等文書）と佐治家資料（『京都府熊野郡誌』編さん関係資料等）の調査報告である（同文書、同資料に（ ）を付して内容を補記しているが、以下、省略する場合もある）。詳しくは、「太刀宮文書・佐治家資料調査について」を参照していただきたいが、今後の同文書、同資料の利用における参考とするという視点から、調査の経緯、概要、関係の論考、同文書と同資料の解題・目録、参考文献、研究成果の地域還元企画の資料から構成している。このような視点は代官所領における公儀触の伝達の分析にも有用なものである。

第二部は、これまでの公儀触の調査を通していただいた教示の論考と拙稿からなっている。教示の論考の一部は再掲載させていただいたものであるが、そのほかは新たに執筆していただいたものである。こちらも詳しくは、「御用留横断研究について」を参照していただきたいが、各地、各種の御用留を横断する構成となっている。御用留の研究は、各地域で行われているにもかかわらず、全国の御用留を対象とする総合的な研究は進んでいないように思われる。第二部はその第一歩になればという視点によるものである。

本科研費研究は、各地域の公儀触伝達の比較研究を基本としている。それには各地域で進められている研究の蓄積に負うところが多いが、比較することによって、各地域の、また全体的に、新たな研究の視点が生じることもあるように思われる。このような視点でも本書を構成したつもりである。

本書が、久美浜、丹後のみならず広く各地域の研究に役立てば幸いである。